

## イデーを見るゲーテ

### 一 邂逅

一七九四年七月二十日のこと、ゲーテはイエーナの自然科学者協会の例会にいつものように出席したが、会が終わったとき偶然シラーといっしょに外に出た。このときゲーテにとってシラーは初対面の人だった。<sup>(1)</sup>ふたりの話題は当然その日の講演の内容におよんだ。とくに深い関心を示していたシラーは「ああいうふう<sup>(2)</sup>に自然を切りこまざくやり方<sup>(3)</sup>には、そこにはいってゆきたいと思ってるしろうとは好感がもてない」と言った。ゲーテはそれに賛意をあらわしながら、なお持論を二三述べた。こ

大 畑 末 吉

れがきっかけとなってふたりのあいだには、思いがけない意義深い対話が展開するに至ったのである。

その詳細な内容はゲーテ自身の報告にまつことにするが、このときの邂逅と対話の事実はズルピツ・ボアスレーの対話録で実証されている。

「ゲーテはイタリアでは常に哲学的思想につきまといていたが、ついにメタモルフォーゼのイデーを思いついた。その後、かれがイエーナでシラーに会ったとき、そういう、ものの見方をシラーに伝えたところ、シラーはとっさにさげんだ。ああ、それはイデーですよ、と。素朴な感性の人ゲーテはいつもこう言っていた。イデー

とはなにか、わたしは知らない。しかし、わたしは現実  
にそれをすべての植物のなかに見ているのだ。」(一八一  
五年十月三日)

この時の対話が、ゲーテにとってきわめて重大な、い  
わばかれの自然観・世界観の根底に触れるほどの深刻な  
問題をふくんでいたものであることは、なによりも、そ  
れから十三年もたった一八一七年に、ゲーテの発行した  
雑誌『形態学のために』第一巻第一号に「幸運なできご  
と」と題して、一種の自叙伝余録を発表し、そのなかで  
詳細に報告していることに徴しても明らかである。

「わたしはシラーの考えに対してこう答えた。あのや  
り方は専門家にとってもおもしろくありません。あんな  
ふうに切れぎれにばらばらに取り扱うことをしないで、  
生きいきと作用するがままの自然を全体から部分へ志向  
しつつ表現する別の方法がたぶんあるのではないでし  
ょうか。シラーはこの点について啓発されることを望んだ  
が、しかし同時に、疑念も隠しはしなかった。つまり、  
わたしが主張したようなことがすぐ経験から生じるとい  
うことを認めることができなかったのである。

そうこうしているうちにわたしたちはシラーの家まで

きてしまった。わたしは話にさそわれてつい家のなか  
はいった。そこでわたしは植物のメタモルフォーゼのこ  
とを元気に弁じた。そして特徴的な線画で、ある象  
徴的な植物をかれの目の前に生えさせた。かれは耳をか  
たむけ、すべてを大きな関心と確かな理解力とをもって  
ながめていたが、やがてわたしが話し終わると頭をふっ  
て言った。『それは経験ではありません。それはイデー  
です』と。わたしは思わずはっとした。そしていささか  
不愉快な気分になった。というのは、わたしたちのなか  
を隔てていた点が、これでいよいよきびしく示されたか  
らである。『優雅と尊厳』のなかの主張が今また思い出  
され、いつもの古い胸の痛みがまたもやうずきそうにな  
った。しかしわたしは氣をとりなおして答えた。『わた  
しが、それとは知らずにイデーを持っていて、しかもそ  
のイデーを目で見ているとは、とてもうれしいことだ  
よ。』

わたしよりも生活の知恵や世才を豊かにそなえている  
シラーは、当時発行直前の『ホーレン』誌のために、  
わたしを突きはなすよりも引きつけることを得策として  
いたが、しかし、わたしの意見に対しては洗練されたカ

ント主義者としての立場に立って受け答えるのだった。そしてわたしの持ちまへの執拗なレアリスムから、相互に活発な反論がかわされるきっかけがいくつも生じ、討論がかさねられた。そのあげくついに休戦状態がもたらされたのである。われわれのうちどちらも勝利者だとは考えられなかった。いずれも自分こそ不敗だと思っていたのである。それにしても、シラーの次のような主張は、わたしをまったくくみじめな気持ちにした。『イデーというものに相応させられるような経験などありうることでしょうか。というのは、イデーには経験などが決して相応し得ないということこそ、イデーの本質なのであるから。』わたしが経験としたことをシラーはイデーと誤っていたのである。それにもかかわらず、われわれのあいだには、媒介し関連づけるものが存在していなければならなかった。」(JA. 30, 391)<sup>(2)</sup>

以上の対話のなかにすでに、ゲーテの総合的な自然観をはじめ、植物のメタモルフォーゼ論、およびそれに関連してイデーと経験のかかわりあい等、当面の問題に直接関係するきわめて重要な示唆が、かずかず含まれている。だが本論にはいる前にわたくしは、この記録から、

人と人との出会いの不思議さについて一言せずにはいられない。

## 二 戦略的同盟

エッカーマンの報告によればゲーテは、シラーとの出会いについてこう言ったという。

「わたしとシラーが知りあった際にも、じつはまったく、なにかデモニッシュなものに支配していたのだ。われわれはそれ以前でもそれ以後でも知りあひになろうと思えばなりえたのだもの。しかし、ちょうどわたしがイタリア旅行を終え、シラーが哲学的思弁に倦みはじめたちょうどその時期に知りあったということは意義深くもあり、ふたりにとってこの上なく実のり多きものであった。」(一八二九年三月二十四日)

しかしわたくしの印象は、兩人の最初の出会いに至るまでの、シラーの側におけるゲーテへの畏敬のまじった親和感と、それにもかかわらずゲーテの側のかたくななまでの拒否的態度とを、ゲーテ自身の記録から知られるとき、いっそう強められるのである。ゲーテは「幸運なできごと」のなかで次のように語る。

「ワイマルに滞在してわたしの近くに住んでいたシラーを、わたしは避けていた。『ドン・カルロス』の出版も、わたしをかれに近づけるにはふさわしくなかった。かれとわたしと同じくらい親しい関係にあった人びとのあらゆる努力を、わたしは断わった。こうしてわれわれは、しばらくのあいだ平行線をたどって暮らしていたのである。

かれの論文『優雅と尊厳』もわたしの気持ちをやなだめる手段とは、たいしてならなかった。主観を限定しているかにみえながら、それを高く持ちあげるカント哲学を、かれは喜んで自己のうちに摂取した。その哲学は、自然がかれに授けた驚くべきものを展開してみせてくれた。しかもかれは、自由と自律の最高の感情にひたりながら、決して継母の態度でかれに接したことのないこの偉大な母に対して忘恩だった。母なる自然が潑刺たる生命にみちた自立的存在として、最深より最高に至るまで合法則的に生み出すありさまを観察することをしてしないで、かれはもっぱら経験的人間の若干の素質の面から彼女を取りあげたのである。かれの文章のなかの、あるきびしい数個所を、わたしは自分に直接向けられたものとさえ思っ

た。その個所はわたしの信条を誤った光のなかで示したものである。もしそれがわたしにかかわりなく言われたとするならば、ますます困ったことだと、わたしはその際感じた。なぜなら、われわれ兩人の考え方のあいだの深い裂け目はますます決定的になるからである。

いかなる融和も考えられなかった。シラーを相当に理解していたダールベルクのおだやかな口添えすら効果がなかった。たしかに、どんな融和策にも反対してわたしが持ちだした理由は、反論の余地のないものであった。ふたりの精神的対蹠のあいだには、地球の直径以上のへだたりがあるということは、だれも否定できなかった。というのは、おたがいそれぞれの側で一つの極として認められていたからであり、まさにそのためにこそ一つに融合することはできなかったのである。』(JA.30,389)

このようなきびしい状況のもとに、イエーナでの邂逅が出現したのである。その結果は当然ながら前記のように、カント主義者シラーがイデーとみなすもの、すなわち象徴的植物・根本植物(Urplanze)をゲーテが現実に見て見るという、双方の考え方の決定的な対立に、対話は終始したのである。それにもかかわずら、ゲーテは

「媒介し関連づけるものが存在していなければならぬ」と言つて、さらに次のように続けるのだつた。

「その第一歩は踏み出された。シラーの人格的魅力は大きく、かれに近づくものはみな、かれの魅力にとらわれてしまったのである。わたしはかれの意向に共鳴し『ホーレン』誌に、わたしのなかにひそんでゐる多くのものを提供することを約束した。かれの妻も——このひとをわたしは幼い少女時代に常々愛しかわいがつていたが——われわれ相互の理解が長続きするように努めた。両方の側のそれぞれの友人たちはみな喜んでくれた。こうしてわれわれは、客観と主観とのあいだの、おそらくは完全に調停することの不可能な、この上なく大きな争いをおして同盟を結んだ。この同盟は中絶することなく続き、われわれならびにほかの人たちに多くの寄与をなしたのである。」

ゲーテ・シラーの友情関係が、対立をとおしての統一、矛盾をはらんでの統合であつたことが以上で明らかである。たしかにこの友情は単なる馴れあいというようなものではなくて、おのおのが確固たる自主性を堅持した上での、いわば男性対男性の「同盟」なのである。グルヌ

スはそれを戦略的同盟とよんで、次のように解説している。

「われわれは、この偉大なふたりの男性の友情の契りにだまされてはならない。この場合の友情は本物で公明なものであつた。ただし、それは同一性<sup>アイデンティティ</sup>に基づいてゐるのではなくて、哲学上・美学上の根本的な問題についてのふたりの見解の相違を承認したうえでの友情なのである。ふたりを結びあわせたものは、理論面における、芸術の創造と規準の客観的合法則性に関する共同の確信、とくに古典主義の法則は、内容と形式の統一にあり、という見解であつた。しかし、この客観的法則性の起源については、ふたりの意見は非常にかけ離れてゐた。シラーは客観的美の起源を客観的イデーのなかに見たし、ゲーテは客観的實在のなかに見た。……かように兩人の友情の契りはあくまで本物の同盟であり、古典主義の明らかな積極的な業績擁護のための真の戦略的同盟であつた。しかし、芸術的合法則性の客観的基礎については、ふたりは決して一致しなかつたし、また、決して一致するに至らなかつた。こうした観点をしかるべく顧慮したうえで、この友情関係の独自性と、疑うことので

きない対立関係とが理解されるのである。ゲーテは後年この関係について次のように言っている。——性格と本質とがわたしのそれと完全に対立しているシラーと、わたしは数年間いっしょに暮らしていた。その際、われわれ相互の影響は、われわれがたとえ一致していない場合でも、相互に理解しあうというようなくあいに働いていたのである。やがてわれわれがふたたび同一の思考か行為のために一致しうるまで、そのあいだ各自は、自分の個性をしっかりと固守していたのである。<sup>(3)</sup>」

### 三 イデーと経験

さて、先の対話でシラーがいかにもカント主義的イデアリストらしく「それは経験ではなくてイデーです」とずばり直截にいつてのけたのに対して、レアリストと名のるゲーテは、「はっとして不愉快な気分になった」にもかかわらず、シラーのことばにまっこうから反駁するでもなく、そうかといって肯定するでもなく、「それとは知らずにイデーを持っていて、しかもそのイデーを目で見ているとは、とてもうれしいことですよ」と、一見煮えきらない返事をしているように思えるのは、わたくし

ひとりの感じかもしれないが、いずれにせよ、「イデーを見る」ということはゲーテの自然観・世界観にとって、なんら疑う余地のない基本的な前提だったはずである。それがシラーによって否定されたことになる。今まで疑う余地のないものと思っていた「目で見るイデー」と「見るという経験」とのあいだのイデンティティという、ズルビツ・ボアスレーに言わせれば「素朴な」考え方がシラーの炯眼によって破れたとでもいうのだろうか。ゲーテはいまや、イデーか経験か、という二者択一の場合に立たされたともいうのだろうか。だが考えてみれば、このような二元論的な考え方こそ、ゲーテの全哲学が総力をあげてたたかうべき相手ではなかったろうか。先のゲーテの煮えきらない態度も、実はこうした立場に立たせられたものの一瞬のためらいにすぎなかったのではないだろうか。

もちろんゲーテにとって、根本植物が現実の経験の対象だというのはない。それにもかかわらずゲーテは、イデーを、根本植物を、あるいは根本植物という根本現象を「目で見る」という。では、「イデーを見る」とはどういうことか。ゲーテは根本現象を見ることの深刻重

大な意味を十分に意識していたのである。実はそのためのためらいでもあったのだらう。たとえば、ファウストが Mitter ということを聞いたときのあの戦慄にも通じるものがあるのではなからうか。ともあれ、「イデーを見る」とは、イデーを現象世界のなかで経験することにはちがいない。

しかし、カント哲学からはナンセンスとでもいわれそうな、イデーと経験との結合ということは、当時支配的だったニュートン自然哲学に淵源する因果律からは、たとえ悟性をいかにはたらかせても解決のつかない難問であらう。現にゲーテ自身、一八二〇年に発表した『ためらいと忍従』と題する論文のなかで、その困難さを縷々述べているのである。と同時にしかし、そこに両者のイデンティテートへの要請がほめかされているのを見のがしてはならない。

「宇宙をその最大の広がり、その細分割の究極において考察するとき、われわれは、全体の基礎にイデーがあり、そのイデーに即して神は自然のうちに、自然は神のうちに、永遠から永遠にわたって創造し作用しているという考えを抑えることができなくなる。観察、考察、

省察、はわれわれをそれらの秘密に近づけてくれる。われわれは大胆不敵にも、あえてイデーをものにしようとし、あるいはまた、分に安んじて、せめて太初に類似するような概念をつくってみようとする。

この場合われわれは、ある特別な困難に遭遇する。それは、必ずしも意識されているわけではないが、イデーと経験のあいだには、ある種の深淵が固定されているかみえ、その裂け目を踏みこえるのは、全力をあげて努力しても無益だと思われるほどなのである。それにもかかわらず、われわれの永遠の努力の目標は、依然としてこの深い裂け目を理性、悟性、想像力、信仰、感情、妄想、また他に仕方がなければ、愚にもつかぬことを動員してまでも、克服することなのである。

こうして誠意をもって努力を続けた結果、イデーが経験に完全に一致することはありえないと主張するものの、イデーと経験とがアナロークである、いな、アナロークでなければならぬということを認める哲学者の説がおそらく正しいのではなからうかと思うようになったのである。

イデーと経験とをいっしょに結びあわすことの困難さ

は、すべての自然研究にとって大きな妨げのように思われる。イデーは時間と空間とに依存しないし、自然研究は時間と空間のなかに局限されている。それゆえイデーのなかでは、空間同時的存在と時間継続的存在とがきわめて緊密に結ばれているのに反して、経験の立場ではそれが常に分離されているのである。であるから、イデーにならって空間同時的・時間継続的として考えねばならないような自然のはたらきは、われわれを一種の精神錯乱におとしめるようにみえる。悟性は感性からばらばらに提供されたものを、結合して考えることができない。こうして寄せ集められたものとイデーとのあいだの抗争は依然として解決されないままである。それゆえ、われわれは、当然ながら、ある程度の平和を求めて詩の世界にのがれるのである。」(JA. 39, 34)

イデーと経験とのあいだの裂け目が永久に克服できないわけではないことが、この末尾の文からもうかがえるが、このことは、以上の論文の冒頭にいわれているように、<sup>1</sup>「全体の基礎にイデーがあり、そのイデーに即して神は自然のうちに、自然は神のうちに、永遠から永遠にわたって創造し作用している」という堅い信念を生涯堅

持していたゲーテとしては当然のことであろう。次のシヨペンハウアー宛の手紙では、それがいっそう簡明に表現されている。

「イデーと経験とはまん中で出会うことは決してありません。それが結合されるのは芸術と行為グロイトによるのみです。」(一八一六年一月二十八日)

なお『箴言と省察』集のなかには、われわれの理解を深め、さらに前進させる貴重な発言が随所に見いだされる。

「最も高いものと最も日常的なものにおいてのみイデーと現象とは出会う。考察と経験とのすべての中間の段階ではそれらは分離する。ここで最も高いものとは、異なったものを同一的(identisch)なものとして直観することであり、最も日常的なものとは、行為グロイトすなわち、分離されたものを行動的に結合して同一なものにすることである。」(JA. 39, 115)

今やわれわれは、「イデーを見る」ということの意味を次のように理解しうる段階に達したように思う。「イデーを見る」とは、「異なったものを同一的なものとして直観する」という最高の境地をさしているのである、



と。ゲーテがシラーに示した象徴的な植物、すなわち根本植物も、こうした最高の境地における直観の対象にほかならない。ともあれゲーテはイデーを、根本植物を現実に目で見たのである。それは決していわゆる「心の目で見る」というような神秘的・超絶的な見方ではない。イデーが現実的に見られるのは、イデーというものが現象界に顕現する本能をもっているからである。次に『箴言』集から

「われわれがイデーとよぶところのもの——それは常に現象となって現われ、従ってあらゆる現象の法則としてわれわれに立ち向かってくるところのものである。」  
(HA. 12, 366)

「イデーは永遠にして唯一である。われわれが複数形を用いるのは当をえない。われわれが認知し、話題になし得るいさゝいのものは、イデーのいろいろの顕現 (Manifestationen) にすぎない。」(JA. 35, 307)

#### 四 「見る」ということ

「イデーを見る」とは——と前述の箴言はわれわれに教える——異なったものを同一的なものとして直観する

ことであり、分離されたものを行動的に結合して同一的なものにする一種の行為である、と。すなわちゲーテによればこの場合、「見る」ということは自発的・積極的な統合行為ということになる。そこで「見る」ということ、「直観」ということを、ゲーテはどう考えていたか、次にそれをたずねてみよう。まず例によって箴言から。

「現象を眼前に見ているものは、すでに、しばしばそれを越えて考えているのである。それについてひとが語るのを聞いているだけのものは、全然なにも考えていないのである。」(JA. 39, 91)

「考えることは知ることよりもおもしろい。しかし、見ることはどおもしろくない。」(HA. 12, 398)

同じことをゲーテは次の短詩に表現している。

Was dem Auge dar sich stellt,  
Sicher glauben wir's zu schauen,  
Was dem Ohr sich zugesellet,  
Gibt uns nicht ein gleich Vertraun.  
(JA. 2, 223)

ゲーテにとっては、見ることは考えることの上位にあった。とはいっても、漫然と見ることになんの意義も認めていないことは言うまでもない。イタリア旅行中、ヨーロッパ最古のバドア大学の植物園で、「あらゆる植物の形態が一つの植物形態から発展したのではないか」という、根本植物ならびに植物のメタモルフォーゼの思想の萌芽を予感した重大な瞬間にもかかは「考えることのない観照など、なんの意味があるか」といつている。

(JA. 26, 65)

「われわれは精神の目をもって見ることを学ばなければならぬ。そういう目でもって見なければ、あらゆる場合にそうなのだが、ことに自然探求の場合は盲人の手さぐりになる。」(JA. 39, 155)

「わたしの思考は対象から分離していない。対象の諸要素や直観は、わたしの思考のなかにはいりこみ、思考によってきわめて深く浸透される。わたしの直観そのものが思考であり、わたしの思考は一つの直観である。」

(JA. 39, 48)

「ものをただ漫然とながめているだけでは、われわれは少しも促進されない。あらゆる注視 (Anschauen) は

観察 (Betrachten) に、あらゆる観察は静思 (Sinnen) に、あらゆる静思は結合 (Verknüpfen) に移行すべきである。したがってわれわれは、注意深く世界を見ることによってすでに理論づけている (theoretisieren) ということができる。しかし、このことを意識的に、自意識をもって、自由に、そして思いきったことばを用いてよければ、イロニーをもって着手し実行するためには、それだけの要領が必要である。そうしてこそ、われわれが恐れている抽象が無害なものになり、われわれの期待する経験の結果が真に生きいきとした有用なものになるのである。」(JA. 49, 63)

以上によってわれわれは、目で見るができるもの——根本植物、根本現象、イデー——の正しい認識には、一種の要領が、修練をつんだ目が必要であることを知った。このような目の持ち主ゲーテは、まさに「目の人」(Augenmensch)とよばれるにふさわしい人間である。

かれは『詩と真実』のなかで青年時代を回顧して「目は、わたしにとって、なによりも世界を把握する器官であった」(JA. 23, 11)といつている。これはゲーテ独特の精神的姿勢をあらわす重要なことばである。目はゲーテに

とってあらゆる器官のうちで最も有効な最も明敏な器官である。そしてこの目で見るということは、対象と、その対象の内的構造とを同時に認識することを用いる。こうしてゲーテは植物を見ることによって、同時に根本植物というイデーの顕現をそこに見たのである。

## 五 根本植物

ゲーテの根本植物発見の具体的ないきさつについては、かれの『わが植物研究の歴史』その他について、その要点をたどってみることにしよう。

「植物は、たとえ各種の条件によって無限に変化してゆくとはいえず、さらに、一方ではごしい岩石に、他方では動きまわる生物に、各所で隣合わせに依存しているとはいえず、それにもかかわらず植物は自分たちの領域内に自足的にとどまっている。どれほどかけ離れたものであっても、植物でありさえすればはつきりした類縁性をもっており、少しも無理なく相互に比較されうるのである。」

それらのかけ離れた植物が一つの概念のもとに集約されるにつれて、しだいにこの直観はさらに高い生命を与

えられるのではないかということが、わたしにはいよいよ明らかになってきた。すなわち、超感性的根本植物の感性的形式というシェーマで当時わたしの念頭にあった一つの要求がそれなのである。わたしは目の前にあらわれたあらゆる形態を、そのさまざまな変化のうちに追求した。こうしてわたしの旅行の最後の目的地シチリアで、あらゆる植物の部分の根本的な同一性が完全にわたしに明らかになった。それからはこの同一性をいたるところに追求して、もう一度認知しようと努めた。」(Jd. 39, 312)

根本植物は超感性的なものである、したがって、そのもの自体としては見ることはできない、すなわちイデーであるが、感性的形式として現象のうちに顕現する——この根本植物追求の目的が達せられたときの喜びと精神の高揚とは当時の手紙が物語っている。

「三月二十五日 ナポリにて

……このできごとのおと、わたくしは海岸を散歩しました。そして静かな楽しい気分になりました。そのとき植物学の問題についてすばらしい啓示があったのです。どうぞヘルダー氏に、わたくしが根本植物については、

まもなく完了するということをお伝えください。ただわたくしは、ほかの植物界をこのなかではだれも認めようとしないうと心配しているのです。胚葉に関するわたくしのすばらしい学説は、それ以上は発展させることができそうもないほど洗練されたものです。」(A. 26, 260)

「一七八七年四月十七日 火曜日 パレルモにて  
わたくしたちがさまざまな幽霊に追いまわされ試されるのはまったく不幸なことです。けさ早くわたくしは文学について夢想を続けようという堅い冷静な決意をいいて公園に出かけました。ところが、いつのまにやら、近ごろ早くもわたくしの背後に忍びよってきている別の幽霊のとりこになってしまいました。ふだんは桶や鉢のなかで、いえ、一年の大部分はガラス窓のなかでばかり見なれている多くの植物が、ここでは喜ばしげに生きいきと自由な空の下に立って、その使命を十分に果たしているのです、いっそうはつきりとしてくるのです。こんなふうにはさまざまな新しい、また新しくされた姿をまのあたりに見えていますと、この一群のなかに根本植物が発見できるかという例の気まぐれが、ふたたびわたく

しの心にわいてくるのでした。たしかに、そのような植物が存在するはずですが、もしこれらが一つの規準に従って形成されているのではないとしたら、あれやこれやの形像が同じ一つの植物であるということを、何によって認識することができましょう。」(A. 26, 314)

「一七八七年五月 ナポリにて  
……なおわたくしはあなたに、植物の生殖ならびに組織の秘密にわたくしがきわめて近くに迫っていること、しかもそれがおよそ思考をめぐらせ得るもののうちで、世にも簡単なものであることを、打ち明けないわけにはいきません。当地の上空のもとではこの上ないみごとな観察ができます。萌芽のひそんでいる主要な点をわたくしは、きわめて明瞭に、なんらの疑念なく発見しました。その他のすべての点もすでに大体わかっております。今はただ若干の点だけが、もう一段明確になる必要があるだけです。根本植物なるものは世にも不思議な被造物で、そのためには、自然までわたくしをうらやむほどになりましょう。この典型とその鍵とをもってすれば、わたくしたちはなお際限なく植物をくふうすることができず、それらの植物はもちろん首尾一貫したものでなければな

りません。言いかえれば、それらはたとえ現存こそして  
いないにせよ、しかも存在し得るものであり、たとえば  
絵画や文学における影や仮象などではなくて、内的な真  
実性と必然性をもっているものなのです。同様の法則  
はすべての他の生きとし生けるものにも適用されるで  
しょう。」(JA. 27, 5)

## 六 植物のメタモルフォーゼ

われわれの素朴な感覚には、発芽状態の植物と開花し  
た植物とのあいだには同一植物とは思えないような断絶  
が、いやおうなく映る。しかし、もちろん同一植物であ  
ることにまちがいはない。こうした個々別々の感覚と、  
それらに内在しているイデンティティの法則との綜合  
をゲーテはメタモルフォーゼなる根本現象によって説明  
しようとした。

「われわれがイデーを現象のなかに認めなければなら  
ない場合に、いつもわれわれをはなだしく惑わせるの  
は、イデーがしばしば通例、感覚と矛盾することである。  
かのコペルニクスの体系は、当時の人びとも納得しが  
たかったが、今も日々われわれの感覚と矛盾するイデー

に基づいている。われわれは自分の認識も理解もしてい  
ないことをただ口まねしているにすぎない。植物のメタ  
モルフォーゼも同様にわれわれの感覚とは矛盾する。」  
(JA. 39, 116)

たしかにわれわれの素朴な感覚にとっては、太陽は東  
からのぼっているのである。まして有機体の生命現象に  
いたっては端倪すべからざる様相を呈する。『ウィルヘ  
ルム・マイスターの遍歴時代』のなかの「遍歴者の心の  
考察」の一編はそれをこう表現している。

「生きている統一体の根本特性——分離し、結合し、  
普遍的なもののなかに没入し、特殊なもののなかにとど  
まり、自分を変化し、自分を特殊化し、生物が多くの条  
件のもとで自己を実証するように現われては消滅し、固  
化しては溶解し、凝結しては流動し、膨脹しては収縮す  
る。さて、いっさいのこうした活動は同じ瞬間に同時に  
生ずるがゆえに、すべては、そしてそのおのおのは、同  
時に起こりうるのである。生成と死滅、創造と破壊、誕  
生と死、喜びと悲しみ、すべては入り乱れ、同じところ  
と同じ度合いで作用しあう。それゆえまた、生起すると  
ころの最も特殊なものも、常に最も普遍的なものの似姿

として、比喩<sup>グライヒニス</sup>として出現するのである。」(HA. 8, 303)

生命がこのように永遠の変化の渦中にあり、すべてが間断なき運動の道程にあるとき、この現象の本質を、従来は機械論的因果関係によって理論づけようとした。しかし、ゲーテは若い時からその理論に不満だった。もちろんゲーテといえどもニュートン物理学に由来する「一定の原因は一定の結果を生ずる」という、事象の合法的な関連を確認する。そして因果律理論が、古い神秘的な目的論的世界観を否認した意義を認めるにやぶさかではなかった。しかし、原因——結果の線は、ゲーテにとって単純な一方交通的關係ではなくて、有機的な弁証法的作用関連であった。

次は『箴言と省察』集のなかの、この問題についてのゲーテの見解を示す二三の例である。

「原因結果の概念は、最も固有な、最も必然的な概念であるが、実際に適用する段になると、無数の絶えず繰りかえされる誤謬の誘因となる。」(JA. 39, 86)

「われわれの犯す大きなあやまちは、たとえば弦を、それが射はなす矢の近くにあると考えるように、原因を

常に結果の近くに考えることである。だがわれわれがこのあやまちを避けえないのは、原因と結果が常にいっしょくたに考えられ、従って頭のなかで近づけられるからである。」(JA. 39, 86)

「思考する人間は原因と結果をしらべるとき、とくにまちがいやすいものである。原因と結果とはいっしょになって不可分の現象をつくる。このことを認識するすべを心得ているものは、実践への、また行為への正しい道の上にいるのである。」(JA. 4, 250)

原因と結果が不可分の現象であるという認識は、両者のあいだに弁証法的なイデntyティートを直観することであり、同時に、その認識の上にメタモルフォーゼの概念は可能となる。

「一つの有機的なものが現象にあらわれるとき、形成衝動の統一と自由とはメタモルフォーゼの概念なくして把握することはできない。」(JA. 39, 336)

「メタモルフォーゼとは、植物を観察するとき、いつもわたくしに押し迫ってくる現象で、もし同時に連続性の概念がわたくしのなかに生じなければ、わたくしはこの現象に気づくことはないでしょう。」(Goethes Werke.

Weimarer Ausgabe. II. Abt. Bd. 13, S. 120.)

「メタモルフォーゼとは、植物が間断なく形成されてゆくとき、のっとる一つの自然法則である。」(ibid.)

## 七 イデーを見る人

以上わたくしは「イデーを見る」ことの意味を模索し、「イデーを見る人」ゲーテの一斑にふれてみたにすぎないが、最後に「イデーを見る人」としてファウストに登場してもらって上述のわたくしの意図を補ってみることにしよう。

ファウストもゲーテと同じように「イデーを見る人」である。ファウストはアルプスの頂近く美しい草原で昏々たる眠りから今しも目ざめて、昇りくる太陽を待っている。太陽は燦然たる光芒をはなつて昇ってきた。ファウストはその光に堪えかねて思わず面をそむけて「太陽はおれの背後にとどまっていってくれ」という。そして、眼前に展開する「七色の虹の Wechselhaer (変わりながらの恒常)」に見入りながら深い感慨を吐露する。

Der spiegelt ab das menschliche Bestreben.

Ihm sinne nach, und du begreifst genauer:

Am farbigen Abglanz haben wir das Leben.

(4727)

太陽はゲーテによれば、イデーであり、根本現象である。エッカーマンには「至高なるものの啓示」と言っている。(一八三二年三月十一日) いずれも人間によって直接認識することは許されない。

「真理は神的なるものと同様にわれわれには直接認識されえない。われわれがそれを見るのはただ反映、例示、象徴においてだけである。われわれはそこに把握しがたい生命を認めざるをえないが、それにもかかわらず、理解したい望みを断念することはできない。」(JA. 40, 55) ここには認識の限界が歴然として存在する。その限界を無視して地霊に迫って拒否され、絶望のあまり毒杯まで手にした、かつてのファウストのことを思えば、現在のファウストの心境を生んだ長い努力と苦難の道がしのばれるのである。しかし、限界を知るということは、ファウスト・ゲーテにとっては決して悲しい諦念を意味しない。

「わたくしが根本現象において結局満足するのは、やはり諦念にはかならない。しかし、わたくしが人間性の限界において断念するか、それとも自分の偏狭な個性の仮定した局限のなかで断念するかは、やはり大きな相違である。」(JA. 39, 72)

ゲーテの諦念の積極性はエッカーマンとの対話からもうかがわれる。

「人間が到達し得る最高のものは驚嘆 (Erstaunen) である。もし根本現象が人間を驚嘆させたならばそれで満足するがいい。それ以上の高いものは人間には与えられていないのだから、その先のものをその背後に求むべきではない。そこに限界があるのだ。」(一八二九年二月十八日)

「思考する人間の最もうるわしい幸福は、探究し得るものはこれを探究しつくし、探究し得ないものは静かに崇めることである。」(JA. 39, 100)

かように積極的な諦念の境地に達したファウストは、一瞬も現状にとどまることのない虹を見て、そこに、はななくうつろいゆくもののすがたを見るということはなかった。むしろそこに、「変わりながらの恒常」をみつ

めて、「しだいに高まる歓喜をもって mit wachsendem Entzücken (4717)」七色の虹を見守ったのである。うつろいやすい現象のはかなさに、東洋的な無常を感じて、現実の生にそむくとはうらはらに、ファウストは今や心機一転、現実の矛盾にみちた人の世にとびこんでゆく。ファウストの社会人としての人生は、実は今から始まるのである。

「色どられた反映にわれわれは人生そのものを把握する。」これこそ「イデーを見る人」ファウストの再出発にあたっての指針である。

さて、「色どられた反映」という現象のなかに人生の真意義(イデー)を把握することができたのは、生起するところの最も特殊なもの(七色の虹)も、常に最も普遍的なもの(太陽)の似姿として、比喩として、現象するからである。(六六ページ参照)それゆえ現象にイデーを見るためには、象徴のはたらきにまたなければならぬ。

「特殊なものが普遍的なものを、夢想や幻影としてではなくて、探究すべからざるものの生きた瞬間的啓示として表現するところに真の象徴がある。」(JA. 38, 266)



(1) シラーのほうは十数年前に、当時すでに高名な作家だったゲーテの風貌に接したことがあった。一七七九年十二月十四日、ゲーテはワイマル公に扈從してシュトゥットガルトに、カール・オイゲン公のミリテーア アカデミーを視察し、その創立記念式に列席した。その席上、学生だったシラーは銀メダルを授与された。

(2) Goethes Sämtliche Werke. Jubiläums Ausgabe の略。数字は巻数とページ数をあらわす。以下これにならう。なお「A.」では最初の表題「幸福なできごと」を「シラーとの初対面」と変えてある。

(3) Wilhelm Girnus: Goethe, der größte Realist deutscher Sprache (Johann Wolfgang Goethe. Über Kunst und Literatur. Eine Auswahl.) S. 43.

「戦略的同盟」というからには、ゲーテ・シラーの古典主義に敵対するものがなければならない。いうまでもなくそれは反動的なローマン主義である。

(4) Goethes Werke. Hamburger Ausgabe の略。数字は巻数とページ数をあらわす。以下これにならう。

(一九六九・八・二八)

付記 本拙文は山田和男名誉教授退官記念号への参加を勧められ、時すでに日時の余裕が少なく逡巡したのであるが、かつての畏敬する同僚としての教授の恩顧を想い、匆匆のうちに執筆したものである。そのため論旨は徹底せず、不備不完に終始したものになったが、あえて微意をささげるしだいである。

(早稲田大学教授)